

平成 28 年度 第 1 回 教育課程編成委員会 報告書

1. 日時：平成 28 年 8 月 3 日（木） 16 時 00 分～17 時 00 分
2. 場所：日本福祉教育専門学校 高田校舎 221 教室
3. 出席者：委員 金川 宗正（社会福祉法人敬心福祉会池袋敬心苑 施設長）
委員 松山 慎司（社会福祉法人西東京市社会福祉協議会 専門員）
委員 渡辺 祐介（公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会）
委員 金井 直子（ソーシャル・ケア学科 学科長）
委員 平野 夏子（社会福祉学科 学科長）
委員 中山 剛志（言語聴覚療法学科 学科長）
委員 細野 真代（介護福祉学科 専任教員・八子久美子学科長の代理）
事務局 宮田 雅之（事務部長）
事務局 寺澤 美彦（教務副部長）
事務局 積田 修真（教務課）
事務局 板野 弘明（教務課）

4. 議事

1) 自己紹介（全員）

本年度より学科長を交えて教育課程編成委員会を進めていくこととなった。

2) 育成人材像とカリキュラムの特徴、特別講師の講義について

(1) ソーシャル・ケア学科（金井）

学科独自の育成人材像を掲げてはいるが、昨今の学生は人間関係の形成が苦手な学生が多く、求めている人材像に到達していないように感じられる。対策として、クラスメートと仲良くできる雰囲気作りをもとに、専門的な部分よりも人間の基本的な部分を教育できるよう環境を整備していきたい。

カリキュラムについては、来年度 4 年生より外部の試験を受けるにあたり、3 年生前期から受験対策講座を開講。一般大学よりも専門学校の 4 年生は授業数が多く、国家試験の受験対策としてもっと早く受講したいという学生の意見が挙がっている。

特別講師については、現場の生の声を学生に聞かせる目的で、国家試験対策講座の一環として、学生と歳が余り離れていない資格取得者を招き、資格取得後どのような変化があったか、求められる人物像、日々の実践などについて話してもらっている。また、災害介護についての講義を介護福祉系の先生をお招きし、自分自身が災害に遭ったらどうするのかというテーマでロールプレイを行い、当事者の災害体験と、自身が当事者になった際に専門職は何ができるのかを考える機会を与えた。

後期は「求められる介護福祉士の実践」をテーマに介護の現場で働く若い職員を招いて講義、生徒との質疑応答の時間を作る予定。

【意見交換】

- ・ 4 年生の過ごし方がとても大切である。国家試験受験のサポートの為に、4 年生のカリキュラムの軽減し、卒業と同時に資格が取れるような環境を整えて欲しい。(松山)
- ・ 学校では学生の負担軽減を考え、最大限努力している。(積田)
- ・ 国家試験の合格率が入学率に繋がるため、そのためには学生へのサポートを強化するべきである。(金川)

(2) 社会福祉学科 (平野)

音楽療法コースを中心に話を進める。福祉への入り口が介護などではなく、音楽や手話が好きで入学する学生が多いため、授業や学校生活の中で福祉従事者としての人物像をつくりあげている。

カリキュラムの特徴は、社会福祉の基礎を学ぶ座学と専門教科が半分ずつ組まれている。しかし音楽を専門的に学ぶ時間は多くは作れないため、週に1回音楽療法実習として介護施設より時間をもらい、利用者様とのコミュニケーションなどを通して実地で学ぶ仕組みをとっている。また本校主催の認知症カフェ (MeMo カフェ) では音楽療法コースの生徒が主体となり活動を行っている。

特別講師についてはソーシャル・ケア学科のように多くはないが、現場で活躍する卒業を招き、現場の声が聞ける機会を設けている。

【意見交換】

- ・近年音楽療法士の求人数が伸びている。(積田) 私の施設でも音楽療法士に音楽活動を依頼しているが、利用者からは嬉しいという声をよく聞く。(金川)
- ・介護職との兼務も増えてきている。(平野)
- ・夏休みを利用して、就職率を高めるための初任者研修を行っており、選択制にも関わらずほとんどの生徒が参加している。(積田)

(3) 言語聴覚療法学科 (中山)

大学卒業後の二年課程で医療職を養成する困難さを日々感じている。即戦力になる臨床能力が求められ、単に国家試験に受ければ良いだけではなく、臨床技術や患者、周辺スタッフへの態度を身につけられるよう教育を行う。学術研究活動とおして研鑽を積み、問題解決型学習を取り入れ授業展開をしている。後任の育成も大切であり、将来指導的な役割を担う自覚形成を目指し、様々なところで触れていく。営利目的の仕事ではなく、奉仕の心を④はぐくむことが大切であり、ボランティア活動に積極的に参加するよう教育を行っている。

カリキュラムについては、言語聴覚士養成期間として国からの指定規則があり、それに則った形で授業を展開している。指定規則は近いうちに改訂の予定があり、今後注視していきたい。

医学教育から始まったコアカリキュラムに則った形での授業科目を制定している。

指定規則+αの能力も必要なため、ゲスト講師を招いて対応している。摂食嚥下障害への対応が増えており、その対象法を身につけておかないと命に関わる。専任教諭による授業に加え、大学病院の嚥下障害認定看護師を招き、特有の問題にどうやって対処するか実演を含めた授業を行う。その他医療現場の見学などもできる範囲で機会を作り、生徒の理解を深めている。

【意見交換】

- ・言語聴覚士の主要現場は医療現場だが、在宅で言語聴覚療法を受けている利用者もおり、最近は活動の場が地域に広がってきている。なかなか福祉の現場で聞けない意見が聞けるので、チームアプローチでの指導を大切にしていけたら良い。(松山)
- ・仕事は続いているのか(金川) 卒業生に話を聞くと、嚥下障害の仕事が多く負担に感じてやめてしまう卒業生も一部いる。担当の患者が亡くなる等した際にショックを受けて続けられないというような声も聞く。患者の生死を受け持つ仕事のため、「死」に向き合う教育をしていかなければならないと日々感じている(中山)
- ・医療職は就職が困難なイメージがあるが、求人はどうなのか(金川) 言語聴覚士は1つの現場から複

数必要になることが多いため、求人に困ることはほとんどない。

(4) 介護福祉学科

ただ単に知識、技術をもった介護福祉士になるのではなく、強くしなやかな軸を持った介護福祉士の育成を目指している。①生活を支える職業実践者になること②こころを育てること③社会人としての基本姿勢を身につけることの3点を身につけることを目標に教育活動を行っている。

介護福祉学科のカリキュラムは、厚生労働省で定められた内容に沿って構成され、そのなかでも本学は特にコミュニケーション力、実践力、マネジメント力の強化に力を入れている。また科目の関わりを図式にすることで学生の理解を深めている。

介護福祉学科ではゲスト講師に、実際に障害に遭われている当事者の方を招き、障害においてどんな不便さがあるのかを聞き、どのような支援ができるかを考える授業を展開した。障害をもつ当事者の方による講義の後、さらに支援したいと学校外でも交流を深めている。

また、いままで実習指導者との交流が少なかったことから、学生と実習先との関係を深められるよう懇談会を行った、これは意見交換により双方の疑問が解決できた有意義な機会となった。

学生の多くに、介護福祉士は高齢者の支援をするという固定観念がある。他の資格や技術と介護福祉士の資格とを併せて活かし、広い視野をもって社会で活躍できるような学生を育てていきたいと考えている。そのために施設に出向いて見学活動や卒業生を招いての講義を通して、現場には沢山の魅力があるということを学生に気付かせ、社会的にネガティブなイメージがある介護福祉士の仕事も、教育活動を通して自分の将来をポジティブに考えられるよう、学科をあげて取り組んでいる。

【意見交換】

留学生が将来きちんと働けるようにしっかりサポートをして欲しい。(金川)

5. おわりに (寺澤)

各学科とも育成人材像には、固定観念にとらわれない柔軟性のある人材の育成という点で共通する面がみられる。またカリキュラムに関しては厚生労働省の指定科目という縛りがある中で、いかに本校独自の特色を打ち出すかという工夫が感じられた。委員の方々から貴重なご意見を参考にさらなる改善につとめたい。なお本年度第2回目の委員会は29年度の向けての改善点の明確化を年内に開催する予定である。

以上